

## ?柳二葉コレクションについて

著者	鳥海 高広
雑誌名	ライブラリーレポート
号	3
ページ	43-54
発行年	2015
出版者	東京音楽大学附属図書館
ISSN	2188-4706
著者版フラグ	publisher
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1300/00001080/">http://id.nii.ac.jp/1300/00001080/</a>

# 高柳二葉コレクションについて

株式会社日本データベース開発（図書館業務委託）

鳥海 高広<sup>1</sup>

## 1. はじめに

東京音楽大学の声楽科教授として長年にわたり後進の指導に当たられていた高柳二葉先生<sup>2</sup>が2013年に逝去され、ご遺族から東京音楽大学付属図書館に資料が寄贈されました。内容は、音楽関係の書籍や楽譜、SPやCDなどの録音資料をはじめ、書簡やアルバムといった多彩な資料がありました。

楽譜資料に限った寄贈は、伊福部昭先生<sup>3</sup>の明清楽<sup>4</sup>、池野成先生<sup>5</sup>の映画音楽の自筆譜という先例がありましたが、個人の方からまとまって遺品が寄贈されたのは今回が当館として初めてのことでした。

2014年の5月から資料の整理に着手し、書籍と楽譜資料についての整理が2015年の3月に一旦完了しました。しかし、その後も運用方法の検討、目録の見直し、破損資料の修理等に時間を要したため、コレクションの公開は2016年4月からとなりました。また寄贈資料のうち録音資料については、今後整理・保存・運用方法を含めて検討することとなりました。

なお、高柳先生のお名前は通常「高柳」という表記で知られていますが、ご遺族によるとご自身で名前を書くときには、はしご高の「高柳」と書いていたそうですので、コレクション名の表記は「高柳二葉コレクション」としました。

---

<sup>1</sup> 東京音楽大学付属図書館からの業務委託として様々な資料の目録作成に携わっている。特に近年は寄贈された手稿譜等の特殊な資料整理、目録作成に携わっている。本稿は付属図書館のスタッフとして携わった寄贈コレクションについての報告です。

<sup>2</sup> 高柳二葉（たかやなぎふたば）は1915（大正4年）東京生まれ、2013（平成25年）死去。東洋音楽学校（現東京音楽大学）声楽科を卒業と同時に講師として採用され1996年（平成8年）に退職するまで長きにわたり後進の指導に当たる。藤原歌劇団（現公益財団法人日本オペラ振興会）でも活躍。

<sup>3</sup> 伊福部昭（いふくべあきら）は1914年（大正3年）北海道生まれの作曲家。2006年（平成18年）死去。東京音楽大学名誉教授。代表作に『シンフォニア・タブカーラ』（1954年・1979年改訂）や『交響頌偈「釈迦」』（1989年）があり、映画音楽も『ゴジラ』（1954年）や『釈迦』（1959年）などを多数手がける。

<sup>4</sup> 東京音楽大学付属図書館編『東京音楽大学付属図書館伊福部昭「明清楽コレクション（資料）」目録』。コレクションのサイト（<http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/minshingaku/>）。

<sup>5</sup> 池野成（いけのせい）は1913年（大正2年）北海道生まれの作曲家。2004年（平成16年）死去。伊福部昭に師事。元東京音楽大学作曲科講師。代表作に『エヴォケイション』（1974年）や『ラプソディア・コンチェルトアンテ』（1983年）があり、映画音楽も『氷点』や『白い巨塔』（ともに1966年）などを多数手がけた。

## 2. 高柳コレクションについて

高柳コレクションに含まれる資料は、書籍や出版譜、CD といった通常図書館でも扱う資料がほとんどですが、その他にも高柳先生ご自身が書かれたと考えられる筆写譜や、先生が筆写をお願いしたと思われる楽譜をはじめ、作曲家から高柳先生に直接渡したと考えられる自筆譜がありました。

また、書籍や出版譜の中に、高柳先生ご自身が書き込みをされた資料があり、この書き込みをどうやって保存するかという点が問題になりました。

こういった特殊な資料に関しては、整理後にもう一度見直し、普通の楽譜資料とは区別して運用することになりました。

特に、作曲家の自筆譜については、著作権の有無の確認や、著作権継承者への連絡を含めて、当館が初めて直面する問題でしたので、日本近代音楽館などに相談し、運用方針を決めることになりました。

SP レコードを含む録音資料については、今後整理保存方法を検討し、整理でき次第公開する予定です。

作曲家の自筆譜に関しては代替資料として PDF のディスクを作成し、閲覧にはその代替資料を運用することにし、その他の資料については、原則館内または当日利用とし、当館の利用規程に従って運用することになりました。

また、コレクションについての冊子を刊行し<sup>6</sup>、同時に Web 上でもサイトを構築し<sup>7</sup> コレクションの広報に努めることになりました。

---

<sup>6</sup> 東京音楽大学付属図書館編『高柳二葉コレクション』東京音楽大学付属図書館，2016 年 3 月

<sup>7</sup> <http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/takayanagi>

### 3. 特殊資料について

高柳コレクションには出版譜の他に、手書きの譜面が多く含まれています。現在と違い、譜面を複製することが容易ではなかったためだと思いますが、書くことによってより深く作品を理解しようと考えられたのかもしれませんが。

多くは歌曲やオペラのアリアを筆写したもので、高柳先生がご自分で歌うために筆写したり、レッスンに使用したりした楽譜の可能性があります。特徴が違う筆跡の楽譜が何種類かあるので、高柳先生ご自身が筆写したものの他に、誰かに依頼して筆写させたものもあると考えられます。

手書き譜の中には、日本人の作曲家の作品がいくつか含まれていて、作曲家本人、もしくは作曲家に近い人物が筆写したと考えられる譜面があります。実際に作曲家の自筆譜なのか、それとも誰かが筆写した楽譜なのかの確認から始めることにしました。

このような資料については、著作権が切れている資料は別にして、著作権の保護期間内のものについての管理方法が確立していなかったために、日本近代音楽館にも相談しました。著作権継承者の方と実際にお目にかかるなどの作業を通して、今後どのように公開するかを決めて行きました。

主な自筆譜資料は次の三人です。

#### ① 関屋敏子

一人目は声楽家として国際的に活躍し、また作曲もされた関屋敏子さん<sup>8</sup>の譜面です。

高柳先生について、弟子の若林七郎さんにインタビューしていた際、「関屋敏子さんのマネージャーさんが先生を訪ねてきて関屋さんの楽譜を渡していた」というお話を聞きました。

関屋敏子さんは藤原義江さん<sup>9</sup>とも共演経験があり、高柳先生も藤原歌劇団に所属していたので、知り合いだったのかもしれませんが、具体的な交友関係はわかりませんでした<sup>10</sup>。

---

<sup>8</sup> 関屋敏子(せきやとしこ)は1904年(明治37年)東京生まれのソプラノ歌手で作曲家。1941年(昭和16年)自ら命を絶つ。国際的なソプラノ歌手として活躍し、オペラ『お夏狂乱』や歌曲の作曲も手がけた。

<sup>9</sup> 藤原義江(ふじわらよしえ)は1898年(明治31年)大阪生まれのテノール歌手。1976年(昭和51年)死去。愛称は「吾等のテナー」。世界的なオペラ歌手であり、藤原歌劇団(現公益財団法人日本オペラ振興会)の創設者。

<sup>10</sup> 二本松市歴史博物館にある関屋敏子の楽譜集に書かれている関屋敏子の略歴に1952年(昭和27年)4月2日に日比谷公会堂で開催された「関屋敏子追悼演奏会」(主催は関屋敏子のマネージャーだった塚本嘉治郎)に高柳二葉先生が出演していたという記述があります。が『音楽年鑑』には高柳先生の名前は載っていませんでした。当日のプログラムが確認できなかったため、参加したかどうかの確証は得られませんでした。また、当時先生を訪ねてきたマネージャーが塚本嘉治郎かも知れませんでした。

若林さんによれば、「関屋さんのマネージャーさんは高柳先生の声が『一番関屋の声に似ている』から」とのことで、レッスン室を訪ねて楽譜を渡されたそうです。

調べてみると、『薔薇』<sup>11</sup>、『坂は照る照る(女馬子唄)』<sup>12</sup>、『船頭歌』<sup>13</sup>という3点の楽譜がありました。関屋敏子さんの作品に関しては、すでに著作権が切れているために、特別な手続きは無いと判断しましたが、この3点が本当に関屋敏子さんの自筆譜かどうかの判断ができませんでした。

調べていく過程の中で、関屋敏子さんの資料が福島県の二本松市に多く残されていることがわかりました。

そこで二本松市に問い合わせた所、関屋敏子さんの実妹である野口喜美子さんから昭和61年(1986)に二本松市に寄贈された資料を二本松市歴史博物館が多数所蔵していて、その中に関屋敏子さんの自筆譜があるということがわかりました。

後述する古関裕而さん<sup>14</sup>の記念館が福島県福島市にあることもあり、両方の施設を訪問し、調査することにしました。

二本松市歴史資料館所蔵の関屋敏子さんの資料の中で、楽譜は、オペラ『お夏狂乱』の出版譜<sup>15</sup>と寄贈された当初から赤い革装がされた楽譜集が2冊ありました。

事前にこの2冊の楽譜集の目次のコピーを入手していたのですが、同じ曲が両方に掲載されていたり、2冊目には印刷譜も含まれると書いてあったりしたので、内容についての詳細な判断はできませんでした。

実際に閲覧させていただいたところ、どちらも同じような赤い革装の楽譜集でしたが、1冊目と2冊目では内容が全く異なっていました。この楽譜集は関屋敏子さんの妹さんである野口喜美子さんから寄贈されたときにはすでに製本されていたそうです。

1冊目の楽譜集は、五線紙に黒の写譜ペンで書かれたもので、歌詞が日本語のローマナイズと英語が併記されたものが書かれていました。こちらは、関屋敏子さんが自分で書いた譜面で、主に海外で歌うために作ったものではないかと思われました。

2冊目の楽譜集は、前半にセノオ楽譜などから出版された関屋敏子さんの楽譜が綴じられていて、後半に手書きの楽譜が綴じ込まれていました。手書きの楽譜は、鉛筆書きのものや青いペンで書かれたものがありました。歌詞は、1冊目と違い、主に日本語の歌詞が書かれて何曲かは英語が併記されていました。1冊目とは筆跡が似ているようでもあり、違うようでもあ

---

<sup>11</sup> 『薔薇』は1925年(大正14年)10月22日作曲。

<sup>12</sup> 『坂は照る照る』は「女船頭歌」とも書かれている。作曲年代不詳。

<sup>13</sup> 後述するように『船頭歌』は『潮の岬』というタイトルで知られている作品。作曲年代不詳。

<sup>14</sup> 古関裕而(こせきゆうじ)は1909年(明治42年)福島市生まれの作曲家。本名は古關勇治。1989年(平成元年)死去。代表曲に『長崎の鐘』や『オリンピックマーチ』などがある。

<sup>15</sup> 『お夏狂乱』は1933年(昭和8年)に初演された1幕2場のオペラ。

る感じがしました。筆記具の違いもあり、複数人の筆跡が混在しているようにも思いましたが、詳細な判断については差し控えることとします。

ただ、この2冊目の楽譜集にある青いペン書きの楽譜と、図書館からコピーして持参した高柳先生がお持ちだった楽譜を比べたところ、筆跡が同じものでした。また、『船頭歌』は、『潮の岬』というタイトルで綴じ込まれていました。

2冊の楽譜集が、関屋敏子さんの自筆譜なのか、それとも1冊目だけが自筆譜で、2冊目の楽譜集は関屋敏子さんと、その他近い人による筆写譜なのかは判断できませんでした。

二本松市立歴史博物館の学芸員である佐藤真由美さんによれば、関屋敏子さんの自筆譜についての詳しい研究はなされていないとのことでした。近年稀に古本市場に、関屋敏子さんの自筆譜というものが出品されることがありますが、それらの資料が果たして関屋敏子さんご本人のものなのか、それとも近い人による筆写資料なのかというのは、わからないと思いました。

二本松市歴史資料館では、関屋敏子さんの自筆譜のデジタル化についても考えているようですが、デジタル化の時期については未定だそうです。資料のデジタル化を含めて、自筆譜の研究は、今後に期待したいと思います。

以上のことを考えて、図書館に寄贈された高柳二葉コレクションにある関屋敏子さんの譜面は「自筆譜か関屋敏子に近い人による筆写譜」という立場を取ることにしました。今後の研究を待ちたいと思います。

## ② 古関裕而

高柳二葉先生といえば、一番人口に膾炙しているのはラジオドラマ『君の名は』<sup>16</sup>の主題歌<sup>17</sup>を歌ったということではないでしょうか？

後に映画化された時の歌手は、織井茂子<sup>18</sup>さんになってしまいました。そのため、NHKにも問い合わせましたが高柳先生が歌った録音は残っていないとのことでした。その『君の名は』を含む古関裕而さんの自筆譜が寄贈資料の中にありました。

はじめは、タイトルだけしか記入されていない楽譜が古関裕而さんのものとはわからず、バラバラに整理されていたのですが、それをまとめた結果、古関作品が25点あることがわかりました。

---

<sup>16</sup> 『君の名は』は1952年(昭和27年)4月10日から1954年(昭和29年)4月8日までNHKで放送されたラジオドラマ。当時は生放送だったため、劇中のBGMは音楽の古関裕而がハモンドオルガンを毎回即興で演奏し、高柳先生も当時内幸町にあったNHKに通っていたそうです。

<sup>17</sup> NHKによれば、主題歌というものはラジオドラマには存在せず、劇中歌ということになるそうです。1953年9月15日に公開された映画で主題歌として歌われたものと同じ曲のためにここでも主題歌として扱っています。

<sup>18</sup> 織井茂子(おりいしげこ)は1926年(昭和元年)生まれの歌手。1996年(平成8年)死去。

福島市に古関裕而記念館があり、古関裕而さんの著作権継承者に連絡を取りたいという連絡をしたところ、長男の古関正裕様を紹介してくださいました。

早速連絡をしたところ、当館へ出向いてくださいました。資料を見ていただいた結果、大半の楽譜が古関裕而さんの自筆譜であることがわかりました。ただ、当時、古関さんには何人かのお弟子さんがいて、もしかしたら弟子が清書したものもあるかもしれないということでした。

関屋敏子さんの自筆譜調査をしに二本松市へ出向いた日に、福島市にある古関裕而記念館も訪ねることになりました。

お話をうかがうと、古関さんの自筆譜は鉛筆でラフに書かれているものが多く、ペンで書かれたものはアシスタントが清書し、最終的に古関裕而さんがチェックした後に署名したものが多くということでした。

当館に寄贈された自筆譜はだいたいペン書きの楽譜です。それが古関さんの自筆なのか、弟子の方の筆写なのかは判断が難しいとのことでした。

お弟子さんの中で何となく筆跡の特徴がわかる人もいますが、まだ研究の途中であって明確な結論は出ていないとのことでした。記念館では古関裕而の署名がある楽譜に関しては、「古関裕而の自筆譜」として展示しているとのことでした。

当館にある古関作品の手稿資料のうちの1点は明らかに筆跡が違うため、高柳先生ご自身か、または別な方が写譜したものだと考えられます。それ以外のものに関しては、当館では基本的に「古関裕而の自筆譜」という扱いをすることにしました。

後に古関裕而記念館から連絡があり、高柳先生から当館に寄贈された楽譜はだいたい古関裕而記念館にも所蔵があるということでした。しかし、『君の名は』に関しては、現在知られている旋律と若干違っている部分があり、また歌詞も2番の歌詞が違う点があることが注目されるとの指摘がありました。ラジオの録音が残っていないために、比較はできませんが、楽譜に書いてあるように当時は歌われていたと考えられます。

福島市の古関裕而記念館には古関裕而さんの自筆譜を含む多くの資料が寄託されており、一部の自筆譜のコピーが展示されています。関連資料も多数展示されていて、大変見どころが多い場所です。今後も、古関裕而さんの研究をするには、記念館が大変重要な役割を果たしていくと思います。

### ③ 廣石徹

もう一人、廣石徹<sup>19</sup>さんという作曲家の自筆譜と思われるものが3点ありました。署名はありますが、廣石さんの自筆なのか、だれかの筆写譜なのかはわかりませんでしたので、廣石さんを知っている人を探すことにしました。

音楽年鑑によれば、廣石さんは長く自由音楽学園<sup>20</sup>という学校で長く教鞭を取られた方で、作品は歌曲や合唱曲を中心に出版されている方だというのがわかりました。しかし、自由音楽学園は、平成23年(2011年)に閉校していて、そこから連絡先をたどることができませんでした。

そこで、JASRACに問い合わせた所、「著作権継承者の方に連絡はできるが、なかなか回答をもらうのが難しい方なので、もしかしたら連絡がつかないかもしれない」とのことでした。こちらの状況を説明して、連絡していただけるようお願いしました。

ネットで検索すると、廣石徹さんはハタノ・オーケストラ<sup>21</sup>で歌を歌っていたことがあり、その時の音源が発売されていました。ハタノ・オーケストラは東京音楽大学の前身である東洋音楽学校の卒業生が創設したオーケストラですが、本学所有の資料や関係者から手がかりをつかむことはできませんでした。また、廣石徹さんは、菅原明朗<sup>22</sup>さんのお弟子さんということまではわかりましたが、それ以上廣石さんについて探ることはできませんでした。

そんな折、以前からご自身の楽譜を当館へ寄贈して下さっていた作曲家の田中雅明<sup>23</sup>さんの経歴に、廣石徹さんのお名前が載っていました。連絡したところ田中さんは作曲を廣石徹さんに師事していました。

その後、田中さんが当館を来訪された折、廣石徹さんの自筆譜と思われる資料をご覧いただいたところ、多分廣石さんの自筆譜だということがわかりました。

田中さんは、廣石さんの生前に自筆譜等を預かっていたそうですが、今直ぐには見つからないとのことでした。

その後、田中さんからうかがった連絡先を通じて、ご遺族より廣石さんの楽譜公開の承諾を得ることができました。

---

<sup>19</sup> 廣石徹(ひろいしてつ)は1900年(明治33年)山口県生まれの作曲家。2000年死去。自由音楽学園専任講師。

<sup>20</sup> 自由音楽学園は1946年に中野に開校した音楽学校。2011年に閉校した。

<sup>21</sup> ハタノ・オーケストラは日本のダンスバンド、無声映画伴奏楽隊である。日本初のダンスバンドともいわれ、後に日本交響楽協会になった。

<sup>22</sup> 菅原明朗(すがわらめいろ)は1897年(明治30年)兵庫県生まれの作曲家。本名は吉治郎。1988年(昭和63年)死去。

<sup>23</sup> 田中雅明(たなかまさあき)は作曲家。



#### 4. 広報資料

コレクションの内容を広報するために、『高柳二葉コレクション』というパンフレットを発刊し、サイトも公開することにしました。作品がある作曲家のコレクションと違い、演奏家のコレクションの場合は、どのようにコレクションの広報をするのかがよくわかりませんでした。録音資料が多い演奏家の場合は、録音資料を列挙することで掲載することができますが、高柳先生は『島原の子守唄』しか残っていません<sup>24</sup>。パンフレット発刊に当たり当初の予定では、コレクションの中にある高柳先生の写真をメインにして、いくつかのエピソードをまとめるという方針でした。その後、作曲家による自筆譜が含まれていることがわかり、自筆譜の掲載を中心に構成し、先生の写真や演奏会プログラムの写真などを載せることにしました。また、高柳先生の教え子である刑部美也子さん、若林七郎さん、高橋静子さんの3名の方のインタビューを掲載しています。

刑部さんは先生が入院されるまで、最後までご自宅に通っていたお弟子さんです。学生時代はもちろん、卒業後も長く先生に習っていらして様々なエピソードを聞かせてくださいました。

高橋さんは、私の同級生小林ゆう子（旧姓高橋）さんのお母様で、親子二代に渡って高柳先生に師事しました。高橋静子さんが同級生である若林さんを紹介してくださいました。若林さんには関屋敏子の自筆譜についての貴重なエピソードを聞くことができました。

お弟子さんしか知り得ないエピソードを聞くことで、高柳先生の人となりや臍気ながら浮かび上がってきたと思っています。

自筆譜は、古関裕而さんのものから『阿武隈に立ちて』<sup>25</sup>と『君の名は』の2点、関屋敏子さんのものは『薔薇』を載せております。残念ながら、廣石徹さんのご遺族との連絡が遅くなってしまい、廣石作品の自筆譜は掲載することができませんでした。

当館発行物に自筆譜を載せるのに、JASRACへ申請しました。パンフレット（冊子）に関しては申請しましたが、リポジトリへの掲載は見送ることにしました。

自筆譜は当館で閲覧できます。

その他に、先生がお持ちだったプログラムの中から、先生が出演したプログラムを掲載しています。

高柳先生初めてのリサイタルのチラシ画像や、藤原歌劇団が1950年（昭和25年）12月15日-29日に帝国劇場で上演した『ファウスト』<sup>26</sup>と1953年（昭和28年）2月1日-2月8日に新橋演舞場で上演した『セヴィラの理髪師』<sup>27</sup>を掲載しています。

---

<sup>24</sup> 『島原の子守唄』は諸説あるが、菊田一夫が作詩し古関裕而が編曲した作品。CDとして発売されているほかに国会図書館が配信している「歴史的音源（れきおん）」でも配信されている。

<sup>25</sup> 『阿武隈に立ちて』は木村政夫作詩。作曲年代不詳。

<sup>26</sup> 『ファウスト』（Faust）はグノー（Gounod, Charles, 1818-1893）作曲のオペラ。

<sup>27</sup> 『セヴィラの理髪師』（Barbiere di Siviglia）は一般的に『セビリアの理髪師』として知られているロッシーニ（Rossini, Gioacchino, 1792-1868）作曲のオペラ。

オペラのプログラムに関しては、掲載にあたり主催団体<sup>28</sup>と表紙絵作者<sup>29</sup>の権利関係进行处理しました。

どちらのプログラムの表紙絵も、とても味わい深いものがあり、高柳先生が活躍された当時のオペラ公演の雰囲気を感じると思います。

このようにしてでき上がったパンフレットは、当館で希望する方に配布している他、東京音楽大学のリポジトリ<sup>30</sup>でも公開しています（自筆譜に関しては公開していません）。

また、パンフレットを元にしたWebサイトを作成し、公開しています。自筆譜資料は著作権のことがあり、公開はしていません。新しいことがわかり次第、随時更新していく予定です。

2016年度の早い時期に、「高柳二葉コレクション」を用いた展示を当館で開催したいと考えております。こちらについても、図書館のサイトでお知らせします。

---

<sup>28</sup> 藤原歌劇団の後継団体、公益財団法人日本オペラ振興会、東宝（帝国劇場の親会社）、松竹（新橋演舞場の親会社）。

<sup>29</sup> 『ファウスト』の表紙絵は土方重巳さん。『セヴィラの理髪師』の表紙絵は妹尾肇（妹尾河童）さん。

<sup>30</sup> <https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/>

## 5. 終わりに

以上のようなことを踏まえて、高柳二葉コレクションは公開・運用開始に至りました。

資料整理が一段落ついたところで、高柳先生のご遺族である高橋弘和様のご夫妻で当館に出向いて、資料の確認をしてくださいました。また、先生についてのエピソードをたくさん教えてくださいました。

高柳先生のお弟子さんである刑部美也子さん、若林七郎さん、高橋静子さんは、先生にまつわるたくさんの思い出をお話ししてくださいました。資料からではわからない、先生の魅力や人柄が伝わってきました。

関屋敏子さんの自筆譜については、二本松市教育委員会文化課文化振興係・二本松市立歴史博物館の学芸員、佐藤真由美様に大変お世話になりました。貴重な資料の利用便宜を図ってくださり、また関屋敏子さんに関する様々な疑問点についても的確なアドバイスをくださいました。

古関裕而さんの自筆譜については、古関裕而さんの長男である古関正裕様が当館に出向いて、資料の確認をしてくださいました。また、福島県福島市にある古関裕而記念館の佐藤太館長、当日対応・説明をしていただいた学芸員の氏家浩子様にはとても有意義な情報をご教授いただきました。

作曲家の田中雅明様には、廣石徹さんの自筆のことで大変お世話になりました。

公益財団法人日本オペラ振興会の仁科岡彦様には、藤原歌劇団のことや高柳先生のことを色々と調べていただきました。さらにパンフレットに掲載したプログラムについても便宜を図っていただきました。

この場を借りて御礼を申し上げます。

高柳二葉コレクションは、東京音楽大学付属図書館 OPAC (オンライン蔵書検索システム)<sup>31</sup> から検索できます (一部非公開)。今後、高柳二葉コレクションの資料が多くの方々に利用されることによって、新たな発見や研究の創造が行われることを願っています。

---

<sup>31</sup> <https://opac.tokyo-ondai-lib.jp/>

## 参考文献

### 事典・単行本

- 久保田栄吉編『歌聖関屋敏子女史』破邪顕正社, 1942年  
音楽の友編集部編『日本の音楽家 '68』音楽之友社, 1969年  
渡辺議『関屋敏子の生涯 プリマ・ドンナ「コロラトゥーラ・ソプラノ」 とこしえに光に  
生きんわが魂』島田音楽出版, 1984年  
古関裕而『鐘よ鳴り響け』人間の記録 18 日本図書センター, 1997年  
増井敬二, 昭和音楽大学オペラ研究所編『日本オペラ史』上・下 水曜社, 2003年  
二本松市歴史資料館『関屋敏子生誕 100年記念特別企画展 世界のプリマドンナ～その  
栄光の日々』二本松市教育委員会, 2004年  
江上優子編『藤原歌劇団創立 70周年記念誌 (1934-2005)』財団法人日本オペラ振興会,  
2005年  
志甫哲夫『SPレコード そのかぎりない魅惑の世界』ショパン, 2008年  
齋藤秀隆『古関裕而うた物語』歴春ふくしま文庫 67 歴史春秋出版, 2010年  
菊池清磨『評伝古関裕而 国民音楽樹立への途』彩流社, 2012年

### 論文・雑誌

- 『音楽新聞』1940年四月下旬号第273号  
高柳二葉「民謡雑感」『音楽芸術』1951年11月号, 69-70頁  
高柳二葉「生きがいを求めて」『青少年に送る言葉 わが人生論』東京編 下 所収(文教  
図書出版, 1994年), 278-280頁  
村岡輝雄「福島・二本松が生んだ伝説のプリマドンナ」『没後 70年追悼関屋敏子 福島・  
二本松が生んだ伝説のプリマドンナ』GHA Noise Reduction KSHKO-17, 2011年発売  
CD

### CD

- 古関裕而編曲・島原の子守唄・高柳二葉(歌)・『古関裕而全集生誕 100年記念第6巻  
貴重盤・秘蔵盤』. Columbia Music Entertainment COZP-380, 2009年

Web サイト

ふるさと人物史「関屋 敏子」 - 二本松市ウェブサイト 2016 年 3 月 1 日アクセス

<http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/soshiki/54/396.html>

古関裕而記念館 2016 年 3 月 1 日アクセス <http://www.kosekiyuji-kinenkan.jp/>

「伊福部昭」「池野成」「関屋敏子」「古関裕而」「妹尾河童」「土方重巳」「土方正巳」「人形劇団ブーク」日本語版ウィキペディア 2016 年 3 月 1 日アクセス

<https://ja.wikipedia.org/wiki/>